

台東育英

VOL.20

台東区立台東育英小学校

No. 10

校長 瀬下 清

<http://www.taitocity.net/taitouikuei-s/>

生きるよろこび ～頑張れ6年生～

副校長 原 之雄

「クラムボン」は笑ったよ。」で始まる「やまなし」は、6年生が初読の感想でほぼ例外なく「何これ？訳が分からない」と発する宮沢賢治の作品です。作者独自の造語や幻想的イメージに満ちた圧倒的な作品世界で、要約を許すような作品ではありませんが、無理を承知で試みます。

2ひきの蟹の兄弟が見た、5月と12月の谷川の様子を映し出した二枚の幻灯。

5月。日光の黄金(きん)が水中に差し込み、光のあみとなって底の白い岩の上で美しく揺れる、生命感に満ちた豊饒な世界。しかし、「クラムボン」は、お魚が銀の腹を翻した瞬間に姿を消し、そのお魚もまた、ぎらぎらと青光りするくちばしの持ち主によって手の届かぬ所へと連れ去られてしまいます。死の意味すら分からない幼い蟹の兄弟が不安に「こわいよ」とふるえる場面で5月の幻灯は終わります。

12月。冷たい谷川の底を照らすのは青白い月の光。辺りはしんと静まりかえり、存在するのは無機質な鉱物のみ。しかしそこに争いはなく、冷たくも静謐な世界が広がります。そこに飛び込んできたのはよく熟した「やまなし」。「やまなし」が蟹の兄弟を穏やかに満たすであろうことを予感させつつ、12月の幻灯は終わります。

この作品の解釈は複雑で深いのですが、敢えて図式的に言えば、生と死の対比ということになるでしょうか。瑞々しく光輝く5月、生きるもの全てがその生を謳歌する美しき世界。しかしそこは盛者のみが存分にその力を発揮する世界。生の喜び、充実とともに生の残酷さ、酷薄さもたっぷり含んだ…。12月、生きることの積極的な気配はなく、あるのは無機質な鉱物のみ。しかし、冷たく静まり返ったこの彼岸の世界こそが全ての争いを超越した真に平穏な場所。そこに「とぼん」と落ちてきた「やまなし」とは…。

生きることは美しく素晴らしい、しかし同時にその酷薄さ、苦悩をも引き受けねばならない。我々が完全な平穏さを求めるなら、それは今ある現実ではなく、彼岸の先である…。そんなことすら感じさせる作品です。この作品のテーマだけを考えるとある種の諦念に行き当たる気もするのですが、注目すべきことに教科書には、その数単元後に谷川俊太郎さんの「生きる」という詩が登場します。

この詩では、「生きているということ いま、生きているということ」というフレーズに続いて、自分自身が本当に生きていると感じる場面、いわば己の生を実感する瞬間が鮮やかに切り取られていきます。そこに善悪、醜美、苦楽といった区別はありません。この一瞬こそが永遠である、と思われるような満たされた瞬間ばかりが「生きている」のではなく、出口の見えない重い苦しみや深い悲しみに打ちひしがれている時もまた、「生きている」といえる、その苦しみに唇を震わせ、その悲しみに涙を流している時こそ、自らの「生」を確かに生きている瞬間であるかもしれない…。

台東育英小の6年生は今、自分のこと、他者のこと、これからのこと、で大いに胸を膨らませ、或いは大いに悩み苦しみ、そしてがいています。しかしそれは、一人一人が真の意味で「生きている」からこそ、とも言えます。苦しくとも「5月」を生きる子供たちを私たちは心から誇りに思います。そしてずっと応援していきたいと思います。頑張れ、台東育英小の6年生！